

1 ツリー図を使って考えを引き出す

(1) 図の基本形と使い方

「ツリー図」は、項目に分けて考えを引き出すときに使います。

大きなテーマを徐々に細分化していきませんが、アイデア、伝達内容、実行内容、問題点、課題、注意点など、引き出す考えの数を増やすことで、大きなテーマについて漠然と考えるのに比べ、細部を整理するのに役立ちます。

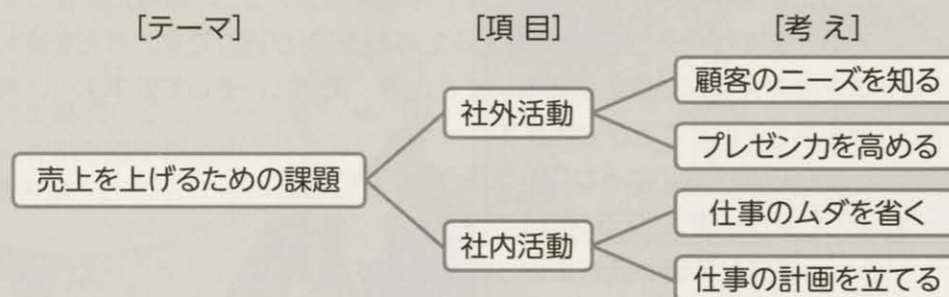
◆ ツリー図の基本形



<使い方>

- ① 何についての考えを引き出すのか、考える【テーマ】を設定します。
- ② 【テーマ】を構成する要素を考え、それを【項目】の欄に書き出します。項目が浮かばないときは、まずテーマを2つに分け、それをさらに2つに分けます。
- ③ 項目ごとに、頭の中にある【考え】を引き出します。

【考えを引き出すツリー図の例】



●項目を分けるコツは？

項目を考えるときは、反対概念で分けると考えやすくなります。たとえば、「外—内」「上—下」「東—西（北—南）」「自身—周囲」「メリット—デメリット」「ハード—ソフト」「あるもの—ないもの」「営業—商品」などです。

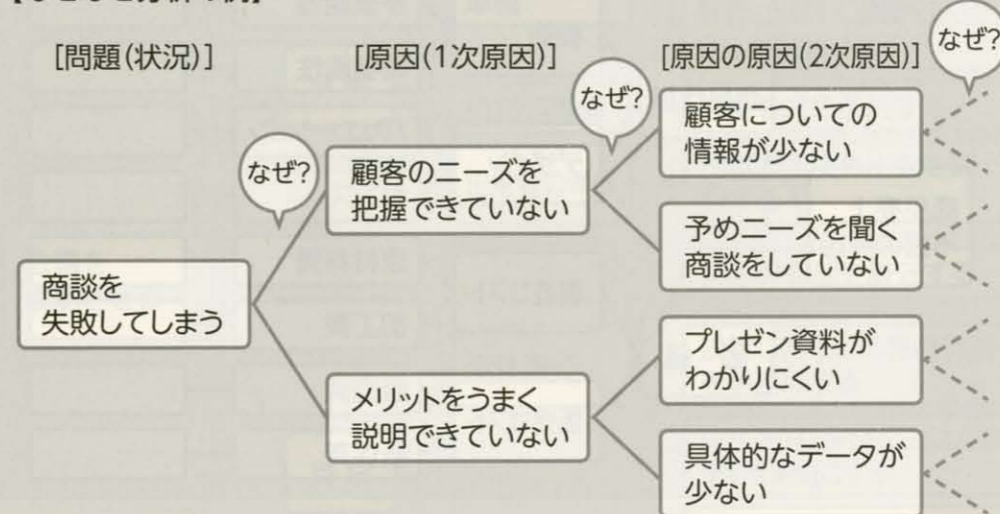


(2) 他のいろいろな思考図

① なぜなぜ分析

「なぜなぜ分析」は、トヨタ自動車元副社長の^{たいち}大野耐一氏が提唱した思考法をもとにしたものです。ある【問題】に対して、その原因(なぜ)の原因(なぜのなぜ)を引き出していく方法で、問題を引き起こした【原因(1次原因)】、さらにその【原因(1次原因)】を引き起こした【原因(2次原因)】と、原因を深く探っていきます。

【なぜなぜ分析の例】



<使い方>

- ① 原因を探りたい【問題(状況)】を設定します。(図左)
- ② その【問題】がなぜ起こったのか、直接の【原因(1次原因)】を考えます。(図中央)
- ③ ②の【原因】それぞれについて、それらを引き起こした【原因の原因(2次原因)】を考えます。(図右)

* さらに深掘りするには、③の【2次原因】を引き起こした【原因(3次原因)】を考えます。そこからさらに深掘りすれば、4次原因、5次原因となります。

●原因はどこまで深掘りすればいい？



原因をどこまで深掘りすればいいのかは、確認できている情報の範囲によります。可能な範囲で深掘りすればするほど、本質的な原因を把握することができます。ただし、原因は事実として確認できるものであることが大切です。想像したことを安易に原因であるとしてしまえば、分析の信ぴょう性がなくなってしまいます。